天津日本人学校における安全教育の実践

前天津日本人学校　教諭
北海道伊達市立伊達小学校　教諭　寺　沢　圭　司

キーワード：安全教育、児童・生徒への危機意識のもたせ方、安全確保に向けて

１．はじめに

1972年の日中共同声明から日本と中国の国交は正常化し、これまで多くの政治・経済・文化交流が盛んに行われている。天津日本人学校は、天津市内の日系企業の駐在員の子女教育機関として天津日本人会が1999年に設立した学校であり、これまで300名の小中学生がこの学校から巣立っている。また、子どもたちの転入と転出も多く、この学校で学んだ子どもたちは世界中で活躍していることであろう。

しかし、第２次世界大戦における人々の傷跡はいまだ癒えず、日中間の摩擦が生じると日本人の安全確保が不可欠となってくる。実際に、2010年には学校の校門に鉄球が撃ち込まれ、2012年には尖閣諸島の領有権問題から反日デモが中国各地で発生し、本校でも児童生徒の安全確保に努めてきた。

私が着任した2013年は反日デモが治まってはいたものの、中国人の日本人に対する感情は決して良いものではなく、街中で大声で日本語を発することを慎みながら生活をしていた。時が経つにつれて、現地の方と和やかに話したり、日本のアニメのコスプレショーが開かれ日本のアニメキャラクターに扮した中国の方が街の中を歩いたり、日本料理店が数多く開店したりと、それまでの緊張した雰囲気が薄まってきている。それにより、われわれ日本人も、どこか緊張が和らいでいる感が見られてきている。そういった中でも、いつまた緊張した状況になっても良いように、危機意識を日々持ち続けることも必要である。

そこで、本校における子どもたちの安全確保に向けたこれまでの取り組みと、子どもたちにもたせたい危機意識の向上とその手立てについてまとめたい。

２．本校の子どもたちの現状

本校に通う子どもたちの多くは、天津市内の日系企業の子女であり３年前後で帰国している。そして、その多くはセキュリティが整った公寓に住んでいる。登下校は公寓や保護者が手配したスクールバスで行っており、公道を歩くことなく家庭と学校を行き来できている。海外生活ということもあり、子どもたちは家に帰っても公寓敷地内で遊んだり、保護者を伴って公寓間を移動したりと、日本の子どもたちのような生活は難しい。

また、保護者も学校生活に対する安全確保は関心が高いところである。そのため、校外活動を行う際にも、移動手段や活動内容、解散場所、指導体制を保護者へ説明することが常に求められている。

３．本校の取り組み

(1) 日常生活

職員はだいたい７時ころには出勤をして、校内や教室の点検を行っている。日中関係において注意しなければならない日の場合は、破損個所が無いか念入りにチェックをしている。７時30分ころからは各公寓からバスやタクシーで子どもたちが登校し始める。2012年の反日デモから、玄関には複数の教員が立ち、子どもたちの安全確保に努めている。８時40分から授業が始まり、昼休みを挟んだ後、15時50分には子どもたちは下校する。その間、学校敷地内に常駐している警備員が学校の見回りをしている。下校時は、体育館に集まって人数確認をした後、子どもたちをバスやタクシーに乗せている。子どもたちの安全を確保するために、バスやタクシーは敷地内に入れている。これは、子どもたちを敷地外へ出さない、教職員も敷地内で下校指導し安全を確保する意味もある。

(2) 運動会

運動会は、天津にいる日本人が一堂に集まる大きなイベントの1つである。運動会は例年秋ごろに行われていたが、9月から10月は日中戦争の記念日付近ということもあり、2013年から5月下旬から6月上旬に行われるようになった。鉄球事件後の2011年の運動会からは、学校の教職員が交代でグラウンドを見渡せるベランダで不審者が侵入しないかを監視していた。2015年の運動会からは、教職員の監視から警備員の増員へと変更し監視を強化するようになった。

(3) 不審者対応訓練

不審者対応訓練は4月に行っている。新年度が始まったばかりであるが、子どもたちの安全意識を向上させるためには良い時期である。

不審者対応訓練では、サイレンが発報し、不審者侵入を伝える校内放送の後、子どもたちは教室内にバリケードを作り静かに身を寄せ、安全が確保された後は速やかに体育館へ移動するという流れで行っている。子どもたちのバリケード作りは素早いもので、安全意識の高さを感じる。(日常生活において、サイレンの誤報が時々鳴ることがあるが、その際にもバリケードを速やかに作ることができる)。また、この訓練では、警備会社の方をお呼びし、街中で不審者と出会った時のことを想定した実演やお話をしていただいている。

(4) 職員研修

本校では毎年、「防災・緊急時対応計画(事故等緊急時対応マニュアル)」を作成している。また、職員は緊急時にしっかりと対応できるように、職員研修として「引き渡し訓練」を実施している。

先述した不審者対応訓練では、実際に警備員が不審者役となり、進入時に教職員はどう行動すべきかを確かめている。そして、不審者が侵入したときの護身法として、警備会社と協力して「さすまた訓練」を行っている。

こういった職員研修では、教職員と外部機関との協力によって、正しい知識のもとで研修を積むことが大事であり、そういった積み重ねが子どもたちの安全確保へとつながってくると考える。

(5) 危機意識の向上とその手立て

日頃から、子どもたちはもちろん教職員も危機意識をもって、安全確保に努めなければならない。右の写真は、廊下に掲示しているものである。避難訓練で身につけた行動を思い出すため、日頃から落ち着いた気持ちで過ごさせるためを目的にこれを設置した。

そして、日頃の指導も定期的に呼びかけるものが必要である。例えば、

①先生方やお客様とすれ違ったら、自分からあいさつをしましょう。

②放送がなったら、静かに聞きましょう。

③時間を守って、落ちついて生活しましょう。

といったことである。これは、日本でも日頃から呼びかけていることであるが、天津日本人学校でも同じである。①については、日頃からお世話になっている人に敬意を表すと共に、その人の顔をしっかりと認識させる点が大事である。また、来校者カードを身につけていることを確認することにより、

自らの安全意識を高めることにもつながってくる。②については、緊急放送がいつでも起こるという意識を植えさせるという点では有効である。しかし、頻繁に放送がなっていては、放送を静かに聞くという効果は薄まるので、必要最低限の使用を心がけなければならない。③については、集団意識をもたせる、規範意識を高める、人員確保につとめるという点で効果がある。

こういった手立てはどこにいても必要なことではあるが、外国で過ごすにあたってより強化すべき点なのではないだろうか。

４．安全確保に向けて

日本の学校においても、不審者の侵入による事件は依然として存在する。たとえ学校が対策を十分に講じたとしても、100％防げるものではない。100％に近づけるための手立てとしては、日本では地域との結びつきが不可欠である。それには、生徒指導担当教諭が中心となり、児童館や補導センター、児童相談所、交番などと緊密に情報交換を取り、地域における協力体制を築くことが求められる。

在外教育施設の場合、日系の警備会社があれば連携はとりやすい。しかし、そのような警備会社がない場合がほとんどであると考えると、やはり地元警察との協力となってくる。とはいえ、日本のような対応ができるとは限らない。そのためには、やはり自分たちの身は自分で守る意識を高めざるを得ない。在外教育施設が日本人コミュニティの中心とするならば、率先して安全教育を行い、活動の様子や安全に関する情報をコミュニティに啓発する必要がある。

５．おわりに

日本においては、子どもたちの安全確保に対して地域との連携づくりに力を入れてきた。この経験を天津日本人学校でも生かしたいと中国に赴任してきた。そこでわかったことは、安全確保に対する意識は日本よりも強いが、対策や手立てはさほど変わらないということである。安全確保のためにどれだけアンテナを高くするか、安全だとは言っても危険はすぐそこにあるという意識をどれだけもつか、そして、安全確保のために地域の情報をどれだけ知っているかという視点を大切にして、日本でも実践を積み重ねていきたい。貴重な経験をさせていただいた方々に感謝を申し上げる。